■研究十二月往来〈281〉

〈節分〉の鬼

田口和夫

能〈鵺〉のアイ

大蔵虎明の古本能狂言「萬集類」に古い間狂言を書き留めて、「ぬえ　首引の狂言也」とあり、また「ともゑ　ひつくくりの狂言也」と言う記事について、それぞれの能と狂言とが素材的に直接の関わりがあり得る事を考証したことがある（田口『能・狂言研究』所収）。〈鵺〉と〈首引〉は「頼政」、〈巴〉と〈引括〉は「暇の印」が両者を結ぶ鍵であった。これは織豊時代を遡る伝承と考えられる。私はその小論で、この二つの狂言が間狂言として使用される可能性を提示しながら、一方、能の後のモドキの位置にある「間の物」としての上演され方で、それをこのように記録したのかも知れないと疑っていた。

昭和六十一年、岩崎雅彦氏が末社アイについて論じられた中に、延年の風流や囃子物風流の影響下に成立したものとして風流アイがあると述べられ、世阿弥時代より後の脇能のアイについて、「時代が下るにしたがって末社アイや風流アイが多くなる」という調査結果を示されている（同氏『能楽演出の歴史的研究』所収）。それは能の作者で言えば、金春禅鳳、観世小次郎信光時代以降と言ってよいであろう。石井倫子氏『風流能の時代』は岩崎論も用いて、この時代の能の風流性を明らかにされている。これらの論に倣えば、世阿弥作の能〈鵺〉の風流アイとして狂言〈首引〉を用いたのは、風流能が盛行した禅鳳・信光時代ならば充分あり得た事と言えよう。

能〈絵馬〉の風流アイ

岩崎氏は能〈絵馬〉のアイについても、その先蹤となる囃子物風流の例を挙げられる。その一は「梁塵秘抄口伝集」巻十四に見える久寿元年（一一五四）三月、京紫野社の風流、その二は「看聞日記」応永二十三年（一四一六）八月、桂地蔵の拍物の風流である。前者の素材は「十二月のおにあらひとも申べきいで立にて」というので、大晦日の追儺（鬼遣らひ）の鬼を基としているらしい。後者は「棒振鬼面ヲ着ス」と言うが、詳細は不明。

能〈絵馬〉は、金剛作か（能勢朝次氏『能楽源流考』）。節分の夜、伊勢の斎宮で黒と白の絵馬を掛けて明年の耕作の予兆を示す神事が行われたことを、その前場に用いている。黒は雨、白は日を表すという。これは「延喜式」臨時祭の項に丹生川上社貴船社に祈雨のためには黒馬を、止雨には白馬を進ずるとされるのと同想である。『謡曲大観』所引の「碧山日録」には、西宮にも同じ絵馬の習俗があったことを記しているので、斎宮だけの神事ではないようだが、その神事は節分、ここでは十二月晦日に行われることになっている。

神宮文庫本「能間・作物作法」の「ゑんむま」はこのアイを次のように記す。

さかりはニて、つちをかたけておに共出ル。立あひ。入さまにつちを打おさむる也

大蔵虎清の「間風流伝書」の「廿七絵馬」には次のように記す。

間鬼どもなり。をにの出たち、（中略）かしらはをくそ頭巾、面ではぶあく。（中略）三人か五人かおなじをにの出立。一やううちでのこづちのゑを三尺ほどながくしてかたげて出る。小袖をつぼをりてもよし。

打出の小槌を担いだ鬼たちが出て、最後に槌で宝を打ち出すさまを演じていたことになる。知られている古台本も同じで、例えば「貞享鞍貫本」では、

サガリハニテ「有かたや〳〵、おさまる御代のしるしとて、ほうらいの嶋よりも、鬼こそ出て此きミに、宝物を参らせんや〳〵」と登場して、絵馬のことを語り、

かやうにめでたきおりからなれバ、われらがやうなるおに共も、ほうらいの嶋より罷

出てたから物をうち出し、此きミにさゝげ申さうと存じ、是まで出て候、いそいでさらバうち出さう、ほうらいの嶋なる〳〵、鬼のもつたからハ、かくれみのにかくれがさ、うちでのこづち、しよぎよむじよ、しやうむしやう、くハつしこくにぐわつたり〳〵△そのまゝ入也、鬼二三人もいでゝ、なでつちのやうにこしらへ、かたげて出る

「なでつち」は「日葡辞書」に「米搗き用の大槌」とある。宝を打ち出すという視覚的な効果を狙ったものであろう。狂言〈節分〉、〈宝の槌〉と同じ呪文で宝を打ち出す場面を持ち、複数の鬼が賑やかに出る風流アイ演出はこの能本来のものであったらしい。この鬼が蓬莱の鬼とされているのである。

斎宮の絵馬について、『古事類苑』所引の「勢陽雑記」は「駒に稲をつけて、かくれ笠かくれ蓑、並砂金袋を畫したる絵馬也」と言い、「往昔はかくれ里より到来すと云々、此例にや畫師は深秘すと云々」とする。絵馬が隠れ里から来たというのは、蓬莱的存在である隠れ里と結びついて面白いが、能以後の書なので、どこまで遡れるか不明である。

〈節分〉の鬼

狂言〈節分〉は、年越の夜、留守をしている女の許へ、蓬莱の島の鬼が「節分の夜にも成たり(なりぬれば＝虎明本)、〳〵、いざまめひろうてかまふよ」(天理本)という次第で登場し、女に懸想して小歌をうたい、呪文ともに宝を女に与え、豆を打たれて逃げるというものである。〈節分〉でも呪文の中で「打出の小槌」と言い、「ぐわつしこくにくわつと」(天理本)と打ち出すセリフを言いながら、宝を打ち出す事はなく、実際に女に与えるのは「隠蓑・隠笠」のみ(天理本)であるのは解せない所である。これは〈節分〉がすでに存在した呪文を流用した一証となし得よう。お伽草紙「一寸法師」の鬼は打出の小槌も残して逃げ、その小槌を振って法師の背が伸びる。万能の小槌を持っていれば、ここで宝を打ち出してもいいところなのである。結局〈節分〉の鬼はもともと打出の小槌を持っていなかったと考えることになる。

「躬恒集」巻三に「同年つごもりの夜、儺の陣をみて」との詞書で、「鬼すらも宮のうちとてみのかさを脱ぎてや今宵ひとに見ゆらん」とある。追儺において方相氏に追われる鬼は、たふさぎだけの裸らしいのだが、その鬼を「蓑笠を脱」いで「人に見ゆ」ると表現したのは、隠蓑・隠笠が鬼の持ち物なのだと意識されていたためであろう。それらを持って人に追われる鬼という点では、〈節分〉の鬼は追儺の鬼の後身ということになる。

寛正五年(一四六四)糺河原勧進猿楽に演じられた「鬼ノマメ」は〈節分〉の古名と考えられる。その時、鬼が「蓬莱の鬼」であったかどうかは確認できない。

春の節分の夜に豆を撒く習慣は中世に始まった事であるという。よく知られているのは「看聞日記」応永三十二年(一四二五)正月八日条で、「今夜節分也・・抑鬼大豆打事」として、豆撒き役の揉め事があった事である。豆を撒く時の唱え言の「福は内、鬼は外」も「臥雲日件録抜尤」文安四年(一四四七)十二月二十二日条に見える。狂言〈節分〉の鬼が追儺の鬼の同類ならば、節分の夜にこの唱え言で追われるのは自然である。しかし確認できる江戸初期からの台本はすべて、これは蓬莱の嶋から来た鬼としている。

〈絵馬〉の鬼は節分という言葉を手掛かりとして登場して来た筈である。風流アイは狂言風流のモノの精と同じく、能全体に密接な関連がなくとも、片言節句を手掛かりにしても登場できるからである。節分の夜は立春正月の観念に依って年越とされている。新たな年を迎えるとき、家々を訪れるのは民俗的には年神とされ、小正月に訪れるナマハゲの類も年神だと解されている。年越の夜に鬼形で訪れ、福を与える神は疫鬼ではない。これをめでたく「蓬莱の島の鬼」と名付けるのは自然であろう。〈絵馬〉の鬼は年神の性格を持つ「蓬莱の鬼」であり、〈節分〉の鬼は、本来は追儺の鬼であったものが、節分(年越)の縁で〈絵馬〉の「蓬莱の鬼」の名を借りる事になり、形の上では福神としての属性を得ることになった。しかし打出の小槌は持たされず、基本に存在していた追われる鬼の性格のままに、最後に追い込まれることになったのであろう。

(文教大学名誉教授)